

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

平成 24 年 10 月 27 日

|             |                |
|-------------|----------------|
| 派遣者氏名（専門分野） | 筒井 はる香 （ 音楽学 ） |
|-------------|----------------|

下記のとおり報告します。

記

|       |  |
|-------|--|
| 研究テーマ | 1830 年代ウィーンにおける鍵盤楽器の発展について——フィスハルモニカを中心に |
|-------|--|

派遣期間

2012 年 7 月 29 日 ～ 2012 年 9 月 26 日

|                | 国      | 都市   | 訪問機関          | 受入研究者                 |
|----------------|--------|------|---------------|-----------------------|
| 訪問<br>研究<br>機関 | オーストリア | ウィーン | ウィーン国立音楽大学    | Mg. Ingomar Rainer 教授 |
|                | オーストリア | ウィーン | ウィーン技術博物館     | Mg. Peter Donhauser   |
|                | オーストリア | ウィーン | オーストリア国立国会図書館 |                       |

派遣先で実施した研究内容

「1830 年代ウィーンにおける鍵盤楽器の発展について」というテーマのもとで、フィスハルモニカというリードをもつ鍵盤楽器が音楽文化のなかで担った役割について研究を行った。現在は注目されることが極めて少ないフィスハルモニカが、19 世紀には、どのような場で、誰によって、どのようなレパートリーが演奏されたのかという視点から、この楽器とそれを取り巻く社会状況を考察しようとするのが今回の研究内容である。具体的には以下の四点に要約される。

**1. 19 世紀ウィーンにおけるフィスハルモニカの受容**

ウィーンのピアノ製作者、アントン・ヘッケル（活動時期 1821-1826 年）がフィスハルモニカという名の楽器を発明した時、識者の間でどのような反響があったのか、鍵盤楽器のなかでどのような位置を占めていたのかを考察するため、19 世紀に書かれた新聞・雑誌や音楽辞典類などからフィスハルモニカをめぐる記事や記述を辿り、その状況を再構築することを試みた。

具体的には、『ウィーン新聞』、『一般音楽新聞』、グスタフ・シリングの『音楽学大辞典及び音楽術百科事典』（1840 年）、シュテファン・フォン・キースによるオーストリア産業史（1823 年及び 1829 年）、ゴンタースハウゼンによる楽器史（1855 年）、ハンスリックの『ウィーンにおける演奏会の存在』（1869 年）などの書物である。これらの史料を閲覧した場所は、オーストリア国立図書館（音楽部門）、ウィーン国立音楽大学図書館、ウィーン工科大学である。

**2. フィスハルモニカのために書かれた楽譜の調査**

フィスハルモニカのレパートリーを把握するため、オーストリア国立図書館で楽譜の調査を行った。限られた期間ですべての作品を網羅することは困難だったので、今回はそのなかでも最も多くのフィスハルモニカ作品を書いたカール・ゲオルグ・リックル（1801-77）を中心に調査した。これらの作品は系統だって年代順にまとめられたものではなく、いわば未整理の状態である。まずは作品の全貌を把握するため、保管されている楽譜をつぶさに見てゆき、出版年代、演奏形態（ソロもしくはアンサンブル）、ジャンルなどを整理する作業を始めた。

### 3. カール・ゲオルグ・リックルの伝記、活動

前項で挙げたカール・ゲオルグ・リックルの伝記と活動を追った。現在では、無名の作曲家であるが、1830年代頃からフィスハルモニカのヴィルトゥオーソ奏者としてウィーンで活動し、この楽器の普及に貢献した人物である。ウィーン市立博物館にはリックルの自筆の手紙があり、ここにはフィスハルモニカとピアノの複合楽器に関する新情報の言及が認められるため、現在、その解読を試みている。

### 4. フィスハルモニカの実地調査

1820年代から1860年代までの約40年間におけるフィスハルモニカの発展を記録するため、ウィーン技術博物館に所蔵されている2台のフィスハルモニカ（両方ともアントン・ヘッケル製作、1825年頃と1835年頃）とピアノとの複合楽器（フィスハルモニカの部分＝ヤコブ・ドイチュマン製作、1840年頃、ピアノの部分＝カール・シュタイン製作、1835年）、および古楽器博物館に所蔵されているフィスハルモニカ（ペーター・ティッツ製作、1860年頃）の実地調査を行った複合楽器とは、グランドピアノの内部にフィスハルモニカの機構を組み込んだもので、両方の楽器の音色を出すことができる。この楽器の存在は19世紀当時のフィスハルモニカの演奏形態を示唆している。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

歴史的史料の記録によれば、フィスハルモニカは少なくとも1870年代までウィーンではよく知られた楽器であった。さらにこの調査で明らかになったことは、現在では、「ハルモニウム」の前身楽器とみなされているフィスハルモニカは、19世紀には「グラスハーモニカ」の変種として位置づけられていたことである。

フィスハルモニカのレパートリーについて、予備調査の段階ではウィーン出身の作曲家ゲオルグ・リックルによる作品があることしか把握できていなかったが、今回の調査によってチェルニーやマイヤベーアやシュトラウスなどの作曲家たちによるフィスハルモニカ作品を見ることができ、またリックルの作品（編曲を含む）は200曲以上あることが確認できた。ただしリックルによる作品の整理は、出版年など未確認のデータがあり、作業の途中である。レパートリーについては、オペラのアリアや当時人気のあった曲の編曲が圧倒的に多い。これらの作品は、数曲をまとめた選集として定期的に発行されていた。フィスハルモニカとピアノの連弾作品が普及していたことは今回の発見であり、両者の関わり合いに着目して研究を進めたい。

実地調査では、年代を追うごとに音域が広がり、送風機やリードなど内部構造が改良されることによって、単純な旋律や和音しか演奏できなかったものが次第に早いパッセージや演奏技術の困難な作品にも耐えうる楽器へ進化したことを確認した。今回調査した4台のうち2台の音を録音した。

## 派遣後の研究発表の予定

2013年度に発行される論文集に寄稿する予定である（締切は2012年11月末）  
その他、国内の学会（日本音楽学会 支部例会等）で発表の予定。